【資料紹介】

武井蔵天文十年五月四日詠草案

武井和人
酒井茂幸

【解題】

本資料は、武井が、二〇一二年一〇月、「京都古典会即売会」にて京都・藤井文政堂より購入したものである。従来紹介されたことのない、詠草案（と断じた所以は後述。以下、本資料）である。武井・酒井は、本誌所掲別稿にて、未刊である高松宮本歌会資料の釈文等を掲出したところであるが、室町期の歌会資料を博捜する過程で、本資料に逢着した。しかし、純然たる歌会資料とはいへないので、別稿とは切り離し、「資料紹介」として掲出することとした。

詠草案と覚しきものは、日記紙背などに広く見られるところであるが、単体で伝存する例は、必ずしも多いとはいへないだらう。その意味で、紹介すべき意義があると考へた。

本資料の法量は、縦二三・七糎、横四一糎。懐紙として見るとやや小振りのものである。二つ折りにして墨書される。料紙は厚めの楮紙。なほ、下段右寄り中央に、切封墨書の一部かと目されるものが存する。

本資料は墨色より、二者、あるいは同一人としても時日を経ての染筆にかかるものであらうとまづは推される（恐らくは前者）。本文において墨書がやや薄いものを示すと、

上段・第二首「露わくる」
合点、「も」（「そ」字右傍）、「な」（「き」字右傍）
上段・第四首「橘も」
和歌全体
上段・第六首「郭公」
合点、「きれ」右傍「よひ」の合点
下段・第一首「しつかなる」
合点、「しら」右傍「きか」の合点

以上を総合して考ふるに、本資料は、詠者が詠草案を書状として某に送り、合点・添削を乞はれた某がそれらを書きつけられて返送したもの、と推定しておきたい（ただし、前掲「橘も」歌は、詠者自身の改案であらうから〔その徴証として、「ん」字の筆勢の近似を一例としてあげておきたい〕、墨色が異なる他の箇所とその筆者を分けて考へる必要がある）。

冒頭「栖雲寺」は、若狭武田元信の子である潤甫周玉のこと。周

玉に関しては、井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町後期』三三八頁他に詳しい。栖雲寺は小浜市浅間にあり、周玉は天文元年に入つてゐる。こまかな考証は後考に俟つ他ないが、この歌会は、周玉が在京の折に開催したものか。

【備考】

解題を武井、釈文を酒井が分担執筆し、相互に検討を加へた。また、釈文作成、栖雲寺の比定に関して、東京大学史料編纂所・末柄豊氏に多くの教示を得た。学恩に深く謝する次第である。

小論は、「校勘の方法に関する基礎的研究」（平成二三～二五年度・科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究、研究代表者＝武井）及び「中世後期歌会資料の総合的研究」（平成二四年度・埼玉大学研究機構プロジェクト（研究費）《一般研究②外部資金獲得促進研究》、研究代表者＝武井）による研究成果の一部を含む。

【釈文】

天文十五月四栖雲寺張行兼日懐紙

夏草

夕露に秋まつのへの
花すゝきほにあらはれて
とふほたるかな
露わくる人もあやしき（そな）
夏草にいとゝよもきの
門はふりにき
たつねきてまれのあとみる
ならひよりやつしははてし
庭の夏草
橘もあやめも一軒はかり
五月の雨のかほりなるらん

梅雨

契きな五月の雨の
かほりとは花たち花も
軒のあやめも
郭公雲のまきれ（よひ）の
たよりあらははれすも
あらなん
五月雨の空
（以下空白）』

浦鶴

しつかなる朝夕なきに
なく鶴も波風しらぬ（き）（＊）
世をすゝろとや
浦とをき真砂になれて
すむ鶉のふむあとよりや
千世はかそへん
（以下空白）』

＊「／」は傍記「き」字にかけられるもの。次頁図版参照。

【図版】

「【資料紹介】武井蔵天文十年五月四日詠草案」（『研究と資料』第六十八輯、二〇一二・一二）

《正誤表》

頁	段行数等	誤	正
P38	上段14行目	天文十五月四	天文十五月四日
	下段4行目	一軒はかり	一軒はより
	17行目	＼き（＊）	＼（＊）きか
	18行目	世をすゝろとや	世をこゝろとや
	20行目	鶉	鶴

※本正誤表は、末柄豊氏（東京大学・史料編纂所・准教授）、外村展子氏のご指摘に基づき作成したものである。学恩に深く感謝する。